特二

博多のお塩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
特二

【Ｎコード】
Ｎ２７３８Ｌ

【作者名】
博多のお塩

【あらすじ】
日本で唯一特殊兵器日本で唯一特殊兵器「ＡＳ」の所持が許されている警察の特殊部隊「特殊武装許可隊第二課」――通称特二のメンバーは、超絶大富豪や、ゴスロリエスパー、天才ヤンデレ美少女と、変人だらけだった！
そんな変人達と元エリートの青山ケンジと、薄幸美少年、峰岸アヤトがテロ組織『ユニオン』壊滅の為動き出す！
初投稿なので見苦しい部分あると思いますが、よろしくお願いします！

序章（前書き）

初投稿です。よろしくお願いします。

序章

「…着いた。」

早朝の日本の某所にある巨大なビル。
そのビルの前に目の下に巨大なクマを作っている所以外は極めて普通に見える男――青山ケンジが立っていた。
彼は極めて普通の人間に見える。しかし、彼を取り巻く状況はかなり非日常的だった。

（緊急会議って、一体何なんだ…？）

朝、いきなり俺の上司――柳沢（やなざわ）ナギサさんから

「今すぐ着替えをもって此処に来い！」

という電話が来たのだ。
ちなみに理由を聞く前に電話は切られていた。
とても焦っていたからイタズラとかではないだろう。
俺は電話が来てから急いでこのビルに向かった。

もちろん電話口の向こうの柳沢さんが焦っていたというのもあるが、それだけではない。

「特二」――特別武装許可隊第二課。
そこが俺の職場だ。

９年前、「ある条約」のせいで自衛隊を保有できなくなった日本の苦肉の策によってできた、警察の管理下にある武装集団である。

対応する仕事は、麻薬絡みの事件や、ハイジャック、さらにはテロ行為の阻止など、「軍事に関わらない事件」――その内の、特に凶悪な事件に対応するための組織だ。

つまり、柳沢さんが俺を呼び出したということは、何か事件があったはずだ。

急いでたし、かなり大きな事件かもしれない。
気を引き締めないと――そう思っていたら、

ビルから、二人の人物が出てきた。

一人は柳沢さん。もう一人は――峰岸アヤト。まだ１６歳の高校生だ。

「ど、どうしたんですか柳沢さん。それにアヤトも」

「おう青山！」

と、柳沢さんは機嫌良さそうに答えた。

それに対し、

「すいません。僕も事情をまだ聞いてません。」

とアヤトが申し訳なさそうに答える。

…困った上司だなぁと思ってたら、

「おい青山、着替えは持ってきたか？」

「ああ、ちゃんとありますよ、ほら。」

スーツケースを柳沢さんに見せる。

「よし、じゃあ今回の予定発表だ。」

やっとか。

「私達は…今回の任務…」

カッ！

「アメリカに行くぞーーーーーー！」

……え？

序章（後書き）

初めてだから下手くそですけど、暖かい目で見守ってやって下さい。
アクションは次の次くらいに…できたらいいなあ…

ユニオン（前書き）

素人さん、コメントありがとうございました！
今後とも頑張りますので、よろしくお願いします。
相変わらず短いですが、どうかご勘弁を。

ユニオン

「ア、アメリカに行くんですか？」

「そうだ。」

柳沢さんの自信満々の顔を見ると、どうやら本当のようだ。

「けど、どうしてそんな唐突に？」

「まあ詳しい話は車の中でする。早く乗れ！」

と、柳沢さんはさっさと自分の車の運転席に乗り込んでしまった。

「アヤト、お前は何か聞いてるか？」

「いえ、僕はまだ何も聞いていません。」

どうやらアヤトもまだ詳しい話は聞いてないようだ。

「そうか…」

全く、あんな突拍子もない上司を持つと大変だ。

「僕はもう慣れましたよ？」

「うおっ！お前まで俺の心を読むな！」

アヤトは楽しそうだ。

「ははっ、アリスちゃんじゃなくても青山さんの考えてることはわかりますよ。青山さんはすぐ顔に出るし……
僕も青山さんと同じこと考えてました」

「お互い大変だなあ」

「ふふ、僕はもう慣れたって言ったでしょ？」

何をどうしたらあの上司に慣れるんだ？

プーーーーー

「おいお前ら！　早く乗れ！」

「おや、お呼びです。行きましょうか。」

――――――――――――――――――――

「二人とも、今回の任務は、平たく言ってしまえば警備だ」

「警備？　なんのですか？」

「二人とも、明日ホワイトハウスで会合が行われるのは知ってるか？」

初耳だ。
隣を見るとアヤトも首を傾げている。

「まあ、だろうな。だってその会合、極秘だし」

……じゃあ言うなよ。
アヤトも苦笑いしてるし。

「まあ要するに、会合があるから、そのホワイトハウスの警備をしろ、ということですね」

「そうだ。物分かりがよくて助かるな。しっかりやってくれよ」

「会合に参加するのはどこですか？」

「日本、アメリカ、ロシア、ドイツ、中国の５ヶ国だ。」

「ふむ…なるほど。日本以外は軍事大国ばかりですから……話し合いの内容は軍事関係のことと見てよろしいですか？」
アヤトが問う。

「ああ、軍事力の保有のバランスについての会合らしい…
どうせアメリカが日本の軍事力を減らしたいだけにセッティングされたものさ。」

「ふーむ…」

アヤトはしばらく考え込んでいたが、

「しかし解せないですね。何故僕達を呼んだんでしょう。アメリカならそれなりの警備をつけられるでしょうし、何より極秘の会合でしょう？警備はいるんですか？」

その言葉に柳沢さんは顔をしかめた。

――これはきっと、何かある。

「あの、本当のとこ何なんです？俺達が呼ばれた理由」

そもそも、アメリカが日本に頼るのは変だ。
日本を敵対視しているアメリカが果たして日本に応援を頼むだろうか。

「…実は今日の会合のこと…ばれているかもしれないんだ。」

柳沢さんにしては珍しく歯切れが悪かった。

「会合の場所や内容、参加国まで筒抜けらしい。…やれやれ、あいつらの無能さには呆れるよ。」

「ちょっと待って下さい、柳沢さん。」

アヤトが真剣な顔で尋ねる。

「誰に情報が漏れていたんです？」

「……」

柳沢さんはしばらく黙り込んだ後、

「…ユニオンってテロ組織、聞いたことあるだろ？」

「ああ、あの軍事大国ばかり敵視する…」

「そうだ。会合に参加する国はほとんど、いや全て奴らの標的だ。流石にそれはまずいんでな。私達の自衛も兼ねてだ。」

「……やっぱり、日本が、その、ユニオンに狙われているのは…」

「ああ、強化型ＡＳを持っているからだろうな。実際、アヤトのＡＳは最強だ。…全く、自衛にしか使ってないから特別永世中立法は守っているというのに…」

「…それだけじゃないでしょうね…」

――――特別永世中立法は、１０年前、永世中立国だったスイスによって提唱された条約だ。
その条約は、まず条約の加盟国は軍事関係のことは行えなくなる。
しかし、その加盟国に攻撃を行った国家に対しては反撃しても良い。
そしてその攻撃を行った国家に世界中の軍隊は無条件に攻撃できる。

特別永世中立法に加盟した国を攻撃した国は、漁夫の利を狙った世界中に狙われることとなる。正に理想的な均衡関係が出来上がるのだ。

この条約は国連で満場一致で可決された。

そして元々永世中立国だったスイスやオーストリア、そして日本など、軍事力を保有していない（自衛隊こそあったが）国が加盟した。

しかし、日本はその条約を――

「政治に使ったから――」

特別永世中立法には、軍事に関する条約を結ぶことも禁止していた。

日本はそれを逆手に取り、

安保を自分達から破棄したのだ。

当然、アメリカのバッシングは酷かった。

しかし、アメリカがどんなに抗議しても、所詮自分達の国益のため、どの国からも指示されず、むしろ彼等への風当たりは強くなっていった。

アメリカ国内でも政府への反発が大きくなっていった。

圧倒的に不利な状況。しばらくするとアメリカは安保から手を引いた。

そのことを祝福する国もあるし、平和の為の法を政治に使うなんて、という国もある。

そのユニオンはおそらく反対側の勢力なのだろう。

「で、会合の会場がユニオンに狙われるかもしれないから俺達はアメリカに行く、これであってますか？」

「いや、まだあるな。」

柳沢さんは妖しく微笑む。

「僕のＡＳが…軍事目的で無いことを示すこと、それが目的ですね？」

「よくわかったな。百点満点だ。」

安保の件で日本を憎むアメリカは、日本がＡＳを保有していることに反発していた。
当然、他にも反対する国はある。
そんな国に示すためだろう。

「流石。ずる賢いな。柳沢さんは。」

それに答えるかのように、柳沢さんはニヤリと笑う。

「二人とも頑張れよ。ボーナスは弾むぞ？」

「ヘイヘイ、頑張りますよ。
あ、そういやアヤトのＡＳや、俺の銃はどうするんですか？」

「もうアメリカには送ってある。…ああ、それと、もしもの時のために、私がスペシャルなプレゼントを入れておいた。困ったら使え。」

「何なんですか？プレゼントって。」

「うーん、ギリギリまで言いたくなかったが、まあそれだと不便か。」

柳沢さんが俺達の座っている後部座席を向いて笑う。

ちょっと、今運転中。前向きなさい。

「おまえら、聞いて驚け――――――」

この時はまさかその「プレゼント」が役に立つとは思わなかった。

ユニオン（後書き）

ちなみに劇中で説明出来なかったことの補足をさせてください。

・核はまだ開発段階。

・冷戦はまだ続いている。

・家電等のレベルは現代と同じ。

ちなみに劇中の西暦は２０１６年です。説明し損ねたので（＾－＾；

コメントお待ちしてます。

遐逅　前編（前書き）

前編と後編にわけてみました。
前半部分が短いのはご愛敬。

邂逅　前編

「だから！特別永世中立法に加盟しているあなた達日本は強化型のＡＳを所持する必要はないだろう！」

ホワイトハウスの会議室。その中で日本、アメリカ、ロシア、ドイツ、中国の５ヶ国の代表が各国の軍事力のバランスの調整というの名のアメリカによる日本への一方的な糾弾が行われていた。

（ここで、ロシアとドイツに日本に対するイメージを下げておかなければ…）

アメリカの大統領であるレーガンは焦っていた。

安保が破棄されてからもう９年が立つ。

それからというもの、アメリカの株は著しく下がっていた。

国際的な発言力も弱まり、反戦運動が起こっている中、好戦的なアメリカという国家への批判は多くなっていた。

国内での反戦運動の流れも大きく、軍事大国としてのアメリカとい

う国家の力は弱まりつつあった。

そしてアメリカの苦肉の策として採られたのが、５ヶ国による極秘の会合だった。

この会合の狙いは、日本に協力的なロシアとドイツを引き込むためだった。

今の状況だと、特別永世中立法の条約のせいで日本に、武力制圧を行おうとすれば今の弱り切ったアメリカはたちまち崩壊するだろう。

だが、その時自分達に攻撃を加えてくる者がいなければ話は別だ。もしアメリカとロシアとドイツの連合軍が出来れば、刃向かう者はいないだろうし、来たとしても返り討ちに出来る。

つまり今回の会合は日本のバックボーン、ロシアとドイツ、あわよくば中国を味方に引き込むためのものだった。

もちろん、今回の会合だけでは到底無理だ。だが、各国の日本へのイメージを下げることくらい出来るだろう。
（これはまだ日本を支配下に置くための計画の布石だよ…ミス・ヤナガワ）
レーガンは厭らしい笑みを浮かべた。

まず手始めにレーガン大統領は日本の代表、ナギサ・ヤナガワ　を質問責めにするつもりだった。しかし、

「特別永世中立法に加盟しているから、ですか。ならそのご指摘は些か間違っていると言わざるを得ませんね。」
流暢な英語でナギサ・ヤナガワは反論する。

「私達はＡＳを凶悪な犯罪やテロ行為の阻止にしか使っていません。」

「だがあれは犯罪を取り締まるためのものとしては大袈裟なのではないか？」

「私達のＡＳが参加した作戦の成功率はほぼ百パーセントです。しかも装着者も安全、余計な死傷者は出していません。これについてどうお考えですか？」

（こいつ…中々やるな…）

レーガンは柳沢の話術に完全に丸め込まれていた。

（だが、このままいい気にはさせん！）

「だが、あなたの部隊の５人の内３人は未成年だ。しかも例のＡＳの装着者もまだ高校生だろう？人道的に問題があるのでは？」

「言ったでしょう？私達のＡＳは装着者を護るために出来てますし、年少者を使っているのは彼等が優秀だからです……どこかの国の、情報を簡単にテロリストに漏らす無能な部隊より、ましだと思いますが」

（この女、何故それを知っているのだ！？）

ナギサの突然な攻撃にレーガンは戸惑っていた。

他の参加者を見ると、皆ニヤついている。

（こいつ…！情報を他の奴らに流したな！）

こうなってしまってはもうフォローは逆効果だ。

テロリストに情報が漏れたというのはあくまで噂だが、ハッキングを受けたというのは事実。

「……っ！」
レーガンは立ち上がり部屋から出ていった。

（やっと終わったか…）

ナギサは胸を撫で下ろした。

（テロリストが来るというのはやはりただの噂だったみたいだな。助かった…）

ナギサは胸を撫で下ろした。

こんな所に長居はしたくはない。早く帰ろう。

各国の代表達に軽く会釈をして、ナギサが立ち去ろうとすると、

バーン！と轟音が響き、部屋が揺れた。

（何なんだ、一体…！）
いや、検討はついていたが。

ユニオン。間違えない。

奴らが来た。
まずい。私達が見つかれば殺される。

早くパニックになっている各国の代表者達を安全な場所に誘導しなければならない。

「皆さん！落ち着いて！地下に隠れましょう！」

ナギサは手際よく代表達を誘導していく。

だが、地下に隠れてもいずれは限界が来るだろう。
それまで彼等が持ちこたえてくれなければ、私達は死ぬだろう

（頼んだぞ、二人とも）

「俺達って、やっぱすごい嫌われてんだなあ…」

わかってはいたが、こうもはっきり態度で示されると辛い。

「まあ、僕達はアメリカ軍にとっては仇敵みたいなものですからね。」

隣のアヤトが笑いながら言う。

俺達はホワイトハウスの裏側の方に配置された。

テロリストは俺達が倒すから、お前らはじっとしてろという　アメリカ側の意思表示だろう。

「しかし、普通テロリストは正面から侵入しないだろ…」

「自己顕示欲が強い組織なら、そんなに珍しくないでしょうね」

「ホントかよ…
しかし、やっぱテロリスト来ないなあ。」

さっきから待っているが、全然来る気配がない。

「やはり、噂は噂。デマだったみたいですね」

「ああ、柳沢さんのプレゼントも無駄になりそうだな」

右手のアタッシュケースを軽く上げて見せる。

ちなみにアヤトも同じアタッシュケースを持っている。

「何事も平和が一番ですから」

「だな」

どうやら無事に日本に帰れそうだ。

「あれ…？」

アヤトが俺の後ろの方の空をぼうっと見つめている。

「なんだ？なんかあった…」

俺の後ろには軍用ヘリが明らかにこちらに向かって飛んできた。

「…くそっ！来やがった！」

戦闘機は正面の方にに向かっているようだ。

「青山さん！先に行ってて下さい！」

「わかった！」

正面の方からは、叫び声と爆音が聞こえる。

おそらく爆弾だろう。

（くそっ！間に合え！）

全速力で正面まで向かうと、
そこには、アメリカの量産型ＡＳを着た兵士が転がっていた。

（1、2、3…くそ！全員やられてるじゃねえか！）

「あれ？生身？」

「！！」

とっさに銃を構える。

銃口の向こうに、カーキ色と白で出来たＡＳが立っていた。

「何棒立ちしてんの？ほら！」

ものすごいスピードでガレキのかけらが飛んできた。

「うおっ！！」

何とか地面を転がって、ガレキをかわし、２発弾を撃ち込んだ。

しかし、弾はそのＡＳに当たる前に空中で有らぬ方向に飛んでいった。

「！！」

（弾が当たらない！？くそっ！）

「何驚いてんの？まだこれから。」

（まだなんかあんのか！？）

「じゃ、始めようか。ウサギ狩りを…」

続く

遡逅　前編（後書き）

前半はなんかやっちゃった感がすごいです。
次からはやっと戦闘シーンがメインになります。
どうぞご期待下さい。
コメントもお待ちしてま～す

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2738l/

特二

2010年10月13日11時49分発行